

巻頭:



トロント補習授業校 夏休み作品展より  
3年1組 吉原 貞流くんの作品  
「オオカバマダラのような虫が食べる葉のりょう」

リレー随筆

## 「音楽とベーキング、私を魅了するミスマッチ」



The Jazzy Made, Music & Baking Studio クルーチハル

「あなたの職業は？」という質問に「音楽家ですが、ベーキング講師でもあります」と答えると皆、首をかきげる。

音楽とベーキング？、変な取り合わせだなと言う所なのかもしれないが、本人にしてみれば至ってまじめに“こんなに似通ったものはない”という持論を通して。

まずその持論に入る前に自分の身に起こった大きな出来事をお話したい。

## 将来を左右した出来事とそれによって得たもの

音楽の領域で私が専門とするところは、ピアノと編曲で、アメリカの教育機関を経てハリウッドでスタジオミュージシャンとして、またロードに出での仕事、数々のコンサート等をこなしていたが、ある時、私の将来を左右する大きな事件が起こった。

それはロサンゼルスのあるクラブでの工作中、転倒した際に、左手がそばにあったゴミ箱の中に入り、そこにあったビール瓶の破片が手首に突き刺さったのである。もちろん仕事どころではなくなりすぐ救急へ。

救急ではそこを縫い合わせる処置はされたが傷はとても深く、後日専門医に回されると、腱とその周りの神経が皆ダメになっていて手術をしたとしても将来は何らかの後遺症が残ると言われた。ただ動脈をやられていればそれだけでは済まなかったのだから運が良かったのかもしれないが。

それからすぐアメリカでは5本の指に入るといわれた専門医に手術をしてもらい、4日間の入院、キャストを数ヶ月つけその後はリハビリ。キャストが取れるまでは自分の身に何が起きているのかよくわからなかったが、時間が経つに連れようやく現実が突きつけられたというか、見えてきた。

リハビリでは、熱いオイルのようなものの中に手をつけたりボールを転がしたり、とにかく、ただそれらを必死に毎日続けた。医者には後遺症だとか何とか言われたけれどそんな事は絶対にありえないと自分に言い聞かせ、早く前と同じ状態にしようとしたらただひたすらリハビリに夢中になっていた。ピアノのような筋肉を使う楽器は少しでも練習を怠ればすぐ後退してしまいプロとしての仕事は出来なくなるからあせっていた。

そしてその間にもそのクラブを訴えようと弁護士を選び、行動に移していたが、

運が悪い事にそのクラブはマフィアが牛耳っていてどの弁護士も皆降りてしまった。それ以上、事を進めるのは危険と助言されしげしげ引き下がる以外にはどうすることもできず、今でもそれを思い出すと悔しい気持ちで一杯である。

その後、リハビリのお陰で随分回復はしたが、前と同じ状態にはならなかった。しかしそれにもかかわらず、たとえ以前とは違っても音楽をあきらめる必要もなく今までやってこられたのは幸運であった。さらにこれがきっかけでベーキングの世界にも入るようになり、「災い転じて福となる」というのはこういうことかもしれないと思った。



カナダ音楽観

カナダに移住して8年、今ここで特に私が力を入れているのは音楽教育。

ここにはロイヤル音楽院、そしてそこ主催のグレード試験システムなど恵まれた教育環境がある。私が所属しているオンタリオ及びカナダ公認音楽教師協会(ORMTA.)は、音楽を学ぶ生徒のレベル向上にとっても力を入れている団体である。生徒の質向上には教える側のレベルと共に教えられる側(生徒とその保護者)の芸術に対する価値観がどうかと言う事が関係してくる。

先ほども名前が出たロイヤル音楽院主催のグレード試験の生徒の点数、あれは先生選びの一つのヒントにする事が出来るいいものだと思う。

聴くのではなく使用楽器や曲の内容の説明や聴衆との質疑応答などがあり、聴衆と一体になったとても教育的な内容になっている。



## ベーキングとの出会い

私とベーキングとの最初の出会いは随分前にさかのぼるが、初めに話した「将来を変える出来事」が起こって悶々としていた時、本格的にベーキングの専門学校に通い、その勉強にも夢中になっていた。すると、それまではただ単に好みのパンやケーキなどをレシピにそって材料を混ぜるだけで、単純においしい、おいしくないだけの世界だったのが、それ以外にも面白い世界があるのだということがわかった。



さて、カナダにおけるジャズ教育はというと、ハンパーカレッジを始めジャズ科を設立している大学が増えているのはうれしい。トロントオールスターバンドも若い人たちの才能発掘に大きな役割を果たしている。ただ本家アメリカと比べるとジャズ人口が少ないせいか、ある高校のジャズバンドなど(私の見た範囲では)ジャズと言うものからは程遠く、もう少しアメリカの高校などをお手本にしたほうがよいのではないかと思えるようなものがあるのも事実だ。

ロイヤル音楽院のグレード試験システムはクラシック系だが、同じように歴史のあるカナダ音楽院がジャズグレード試験システムを立ち上げジャズ音楽演奏の質向上に向けて動いている。ただ、まだピアノの先生でジャズも教えられる人たちが数少ないという事が、この試験が今の所あまり知られていない原因の一つになっているようだ。私自身もこれにはいろいろかわっていききたいと思っている。

昨年、私もメンバーになっていたIAJE(国際ジャズ教育協会)USAがまさかの倒産をした。カナダ本部からはそれに巻き込まれる事はないと説明をうけていたにもかかわらず、消滅。あの協会のジャズ教育に対しての働きが大きく、2年前、トロントで行われた最後のIAJEコンフェレンスも大変良いもので、スカラシップ等、若い人たちのやる気を支えていたのに本当に残念と思っていた矢先、CAJE(カナダジャズ教育振興協会)から、ついに念願だったこの協会がまた再び立ち上げられたと連絡が入ってきた。これからのトロントのジャズシーン、どう前進していくか楽しみだ。

音楽教育に力を入れている、と述べたが、その一環として「若い人たちのためのコンサート Young People's Concert」というのがある。アメリカや日本でやってきたコンサートのプロデュースなどの経験を生かし、ここでも何か面白いものができないかと思案していた所、オンタリオおよびカナダ公認音楽教師協会(ORMTA)から依頼を受け本格的に協力をする事になった。題名では「若い」とあるが、若い人たちのためだけではなく老若男女、誰にでもコンサートの面白さを伝えるというのが主旨で、楽器演奏のみを

## 我がベーキング考察カナダ編

カナダに来て一番苦労したのは気に入った材料を集める事とその材料にあったメニュー(レシピ)の編集をする事で、粉も水も日本のそれとは大きく違い、日本で使っていた分量ではうまく出来なかった。

特に私が重要と考えているのがオーガニック系の材料で、そうなるを探すのもっと大変。すべてを用意するのに2年ほどかかったが、今はここカナダでも納得がいくようなものが作れるようになり、生徒さんともども喜んでる。カナダにある材料で、もちろん添加物なし、オーガニック中心、それで自分の味が出せるかどうかという事が重要課題だ。

ジャジーメイドのメニューはどれも手間隙をかけて作るもので、今は忙しい世の中だからと、何でも手早くインスタントで出来るものを望む人たちのニーズには、答えてはいない。反対に忙しい世の中だからこそ、時間をかけて臨むことが重要だと考えている。熟成されたものには真の味わいがある。

最近では、コース以外にも単発講習のリクエストが多く、いろいろなメニューをジャジーメイド(Jazzymade)流にアレンジして提供している。

## 音楽とベーキングの類似点、私の持論

私にとってのベーキングの魅力は、ただレシピに書いてあるものをその通り作って終わりではなく、自由に材料、配合をいろいろ考える事。たとえば塩がわずかな違いでどれだけ他の材料に影響を与えるか、これをこの計算でこの時間この温度で混ぜたらふくらみ具合は、とかそういった実験的なことがとても楽しい。

音楽の場合は、もし演奏であるならば、指先のタッチ、手首、腕などの使い方や音が変わる様、編曲であれば音、和音の組み合わせ、楽器の組み合わせ等、どうしたら自分の思ったような感じに変えられるか等。

以上がまさしく私が言いたい音楽とベーキングの類似点である。

自分の思いを音楽は音符、音で表現、ベーキングは粉など材料で表現と言う所だが、この追求には終わりが無い。

一見不可思議な組み合わせだと思われる「音楽」と「ベーキング」。しかしこの mismatches の裏側には深い意味、そして共通の言葉、「創造」というパッションが秘められているのである。種類を問わず熱中できるものがある人生は面白い。



The Jazzy Made Music & Baking Studio 主催、[www.jazzymade.com](http://www.jazzymade.com)  
Oakville に住

## カナダで事業：業界 表話ウラ話

第16回 貿易観光運輸委員会より  
「北米鉄道輸送に革命をもたらせた  
ダブルスタックカー(Double-Stack Car)」



西濃シェンカー (Schenker of Canada Ltd.) 渡部 鴻次郎

世界は日進月歩で、進歩を遂げています。単純に、国際間のやり取りを振り返っても、かつてはFAXで行っていた海外との通信が、今では瞬時に世界中と交信が出来るインターネットになり、そのインターネットも、日に日に高速が図られており、画像や書類の送信も、E-mail に添えて送受信ができる時代になりました。技術革新や技術革命により、今では、通信端末の小型化や、携帯性も飛躍的に進歩し、携帯電話やブラックベリーによって、24時間通信を維持できるようになっています。

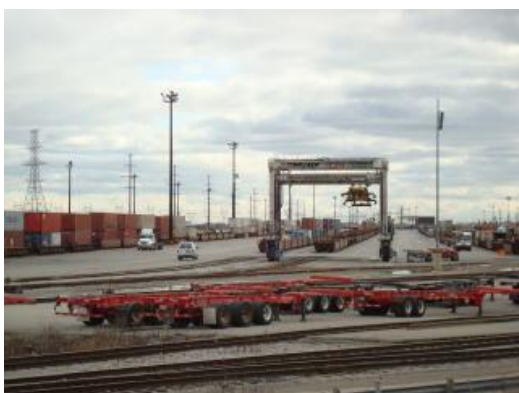
5月の『とりにあむ』にも書きましたが、20世紀の国際貨物輸送は、コンテナ輸送によって革命が起きました。そして、そのコンテナ輸送は、瞬く間に世界の物流スタンダードとして普及してゆきました。しかし、そのコンテナ輸送が本当の意味で世界の国際物流の主流になるためには、世界最大の消費地域であり生産地地域である、北米大陸において、普及し、主流になる必要がありました。広大な国土を有するカナダおよび米国は、東西の港に到着したコンテナをどうやって内陸の消費地に効率よく持ち込むかが、そのキーを握っていました。

当然、安価で内陸に持ち込むためには、鉄道輸送が一番です。1970年代には、コンテナは鉄道の貨車に積まれ、内陸に運び込まれるルートや方法が確立されました。

そして、1970年代中ごろには、大陸を鉄道で横断する、ミニランドブリッジ (MLB) という輸送方法が確立します。

これによって、日本を含めたアジア発のコンテナは、中南米パナマのパナマ運河を経由しなければ、北米大陸東海岸の港や都市へは運べなかった時代から、鉄道によって西海岸から東海岸に運ぶことが出来るようになりました。また、紅海から地中海を経由したインド、中東の貨物に加えヨーロッパの貨物も北米東海岸に下ろされた後、鉄道を使って内陸および、北米西海岸の港や都市へ運ばれるようになりました。

1980年に米国において、貨物輸送のDeregulation (規制緩和) が、スタッガード法という法律によって施行されました。カナダおよび米国にあった、40近い大小の鉄道会社は統廃合を繰り返し、その競争力、運賃の低価格に生き残りを掛けて挑むこととなります。



規制緩和の“みそぎ”にさらされた鉄道業界に、救世主として現れたのが、「ダブルスタックカー (Double-Stack Car)」という新型の貨車です。このダブルスタックカー (Double-Stack Car) というのは、

コンテナ積載用に超軽量に開発された鉄道貨車で、今まで1台の貨車に1本のコンテナしか積み込まなかった輸送から、2本のコンテナを2段積みして、貨車に搭載することが出来るように改良開発された新型の鉄道貨車です。

ダブルスタックカー (Double-Stack Car) の出現により、鉄道会社は、路線の複式線化 (単線の軌道を複数の軌道にして輸送能力を強化する方法では、土地の買収や新たなレールを敷く等の膨大な設備投資が必要となります) の様な大掛かりな投資をしなくとも、輸送能力を2倍に飛躍的に拡大することに成功したのです。それは、同時にコンテナ1本あたりの内陸の消費地への鉄道運賃の低減につながりました。



このようにして、世界最大の消費地であり、自動車、重機械から農産品に至るまで多種多様な製品の巨大な生産地でもある、北米大陸の内陸部へ、コンテナ輸送が一気に普及してゆくこととなります。

余談にはなりますが、調べてみると、このコンテナを2本を積むことが出来る超軽量の鉄道貨車：ダブルスタックカー (Double-Stack Car) の開発には、日本の石川島播磨工業が一役買っていました。

また、1980年代のDeregulation (規制緩和) により、40社あった北米の鉄道会社は、2000年初頭までに、カナダ主要2社 (Canadian National Rail / Canadian Pacific Rail) 、米国主要4社 (Union Pacific Rail / BNSF / Norfolk Southern Rail / CSX) に淘汰されました。このことは、Deregulation (規制緩和) 以前は、多数の鉄道会社の軌道を使い継がねば、コンテナが内陸へ輸送できず、無駄や、時間的なロスが生まれていましたが、乗り継ぐ鉄道会社の数が淘汰され、軽減されることにより、無駄な路

線は統廃合が行われると共に、鉄道における幹線の整備が進むこととなりました。

また、ダブルスタックカー (Double-Stack Car) の導入と同時に、鉄道の長大化が図られ、一回の列車が輸送する貨物量の拡大が図られました。

動力機関車の強化や、複数の機関車を連結することによって、100両を超える貨車を連結した列車が走るようになりました。これが、北米で俗に言われる「マイルトレイン (Mile Train)」です。全長が1マイルつまり、1.6km以上もある列車です。そして、この「マイルトレイン」が大陸の輸送を担うようになっていきます。



これら、マイルトレインは、コンテナの積み下ろしを繰り返しながら、トロント、シカゴ、デトロイトといった内陸の大都市に、西海岸の港から6-7日間でコンテナを運び、最終的に東海岸に至ります。



安価および大量に、北米大陸の内陸部へコンテナを輸送できるようになったことは、コンテナ輸送の飛躍的な普及を促進しました。また、これは、北米大陸西海岸の港から鉄道につながるコンテナのみならず、パナマ運河や、スエズ運河を経由して北米大陸東海岸の港に下ろされるコンテナについても、内陸の都市への輸送の道を開きました。

また、北米東部沿岸部の都市は、パナマ経由でコンテナを受け取る以外にも、鉄道によって西海岸から持ってくるという、選択肢も持ち得ようになり、北米大陸のコンテナ輸送はルートに多様性を持つようになると共に、コンテナ輸送自体が大きく北米大陸内で普及してゆく足がかりを掴むこととなりました。

私が、マイルトレインや、コンテナ鉄道輸送の革命を起こしたダブルスタックカー (Double-Stack Car) を初めて見たのは、17年ほど前に、会社から米国に実務研修に出された折のことでした。ロスアンゼルス郊外の砂漠の中を、3~4台の連結されたディーゼル機関車によって引かれる長大な列車を始めて見たときに、北米大陸の物流のスケールの大きさに感動したことを思い出します。フリーウェイの路肩に車を止めて、持っていたビデオカメラをズームにして、その延々と連なる、ダブルスタックカーに2段積みになったコンテナを無心で撮りました。しかし、あまりの長さに、いつまでもたっても最終車両が来ず、最終列車を待たずに、撮影を終わらせたことを良く記憶しています。

最後に、北米大陸内陸の都市トロントで働き生活をするわたくしたちも、1980年代中ごろに開発され、北米大陸の鉄道輸送に革命を起こした新型の超軽量貨車：ダブルスタックカー(Double-Stack Car)の恩恵を、日々受けていることは間違いありません。

## 行ってよかった！おすすめスポット

### 「ナイアガラ・オン・ザ・レイクの不思議な魅力」



NTN ベアリング 牧 孝夫

週末に時間があると、私はナイアガラ方面に車を走らせます。目的地はナイアガラの「滝」ではなく、カジノでもなく、“ナイアガラ・オン・ザ・レイク”。田舎道をドライブしながら、目の前に広がる景色を楽しみ、時々車を停めてカメラに風景を収めます。開放感にあふれた景色のなかに自分を置いてみると、繁雑多忙な日常を忘れ、気分が和みます。

QEWを西へ。オンタリオ湖とエリー湖を結ぶ運河を跨ぐGarden City Skywayを過ぎて間もなく、Exit 38bを出て、ナイアガラ・オン・ザ・レイク方面に進路を取ると、道の両脇に広がる果樹園…のどかな景色が疲れた気持ちを解してくれるような気がするのです。

果樹園が広がるナイアガラ・オン・ザ・レイク近辺での楽しみは、ワイナリー訪問。それぞれのワイナリーに個性があって、その建物、内部のディスプレイ、商品棚などを見て歩くのも結構楽しく、次々にワイナリーを「はしご」して、その印象を比べてみるのも一興です。もちろん、食事とともに美味しいワインを味わうことも大きな楽しみであることは、言うまでもありません。



ナイアガラ・オン・ザ・レイクの街に程近いブドウ畑の中にある有名ブランドのワイナリー。まず、ランチの予約を入れていたレストランの窓際の席に着席。陽光が眩しいくらいにテーブルに振り注いでいます。ガラス越しに広がるブドウ畑を眺めているだけでも、気持ちが明るくなってきます。

やがて、運ばれてきたスパークリング・ワイン。グラスの中で小さな気泡が次々に浮かび上がってきます。前菜、そしてメイン・ディッシュ。料理に合うワインなのか、ワインに合う料理なのか…。店の雰囲気、おしゃべり、料理、そしてワインを楽しむ、ちょっと贅沢だけど、素敵大人の休日の過ごし方だといえるでしょう。



ワイン製造工程の見学ツアー（有料）もあります。畑で、ブドウの種類や収穫期などについて聞いたあと、ワインを絞る工程、樽詰めをする工程などの説明があり、樽の醸造庫も見せてくれます。そして、テイスティングの仕方、ワインの味わい方も教えてくれて、奥深いワインの世界の入門編を体験することができるのです。

ご家族で果樹園に行き、果物の木を観察するという楽しみ方もあります。春、果樹園には、りんごや桃、さくらんぼなどの木に見事な花が咲き誇ります。夏には青々とした葉が茂り、収穫期の秋には色づいた果実が…。食卓の上やスーパーマーケットの売り場で果実の部分しか見たことがない子供たちは新しい驚きを発見し、親子の会話も弾むことでしょう。



ナイアガラ・オン・ザ・レイクの街は、ご存知の方も多いと思いますが、雑貨、小物、ジャムなどを売っている店がたくさんあり、見て回るだけでも楽しいところです。夏ならば、



アイスクリームを食べながら散歩したり、12月ならクリスマス・ショップでお気に入りのオーナメントを探すなど季節感を味わいながら、のんびりぶらぶら週末を過ごすのもいいものです。

トロントから90分程度のドライブですので気楽にいくことができます。世界的に有名な「滝」とは異なり、控えて派手さがなく、いつ、何回行っても飽きることもなく、訪れるたびに新しい景色や発見に出会うことができる場所が、ナイアガラ・オン・ザ・レイクの不思議な魅力なのです。ちょっと気晴らしに、次の週末にナイアガラ・オン・ザ・レイクヘッドドライブに出かけませんか？



(言わずもがなですが…車を運転される方は飲酒、脇見厳禁です。交通安全には充分お気をつけて、ドライブをお楽しみ下さい)

## 私のとっておきの店

「甘いもの好きですか？」  
Monsieur Félix & Mr. Norton」



商工会事務局 伊東 義員

自分は、50を過ぎたオヤジですが、甘いもの大好きなんです。

数年前にそれまで浴びるほど呑んでいたお酒をスパッと止め、今は甘党一直線です。ケーキ、チョコレート、アイスクリーム、大福、あんみつ、などなど。あ〜、思い浮かべるだけでも、よだれが…。まあ、オヤジの妄想はこれくらいにして、

これからのホリデーシーズン、暖かい部屋でお気に入りのコーヒーや紅茶を入れ、家族や気の知れた友人とお茶するなんて、いいと思いませんか？

そこに美味しいクッキーがあれば、最高ですよ。

そこで今回は、とても美味しいクッキー屋さんをご紹介します。

「Monsieur Félix & Mr. Norton」



スイスのパティエ学校で一緒に学んだという、生粋のフランス人 Félix Renaud と、チョコレートチップクッキー発祥の地であるボストン（知りませんでした）生まれの Norton Feetwood III の二人が、1985年にモンリオールに最初の店を開店したのが始まりだそうです。（因みに、Mr. Norton は、スイス時代に会ったモンリオール出身の女性 Julie を忘れることができずに、彼女を探しにモンリオールに来て、既にそこでお店を開いていた Félix と再会したのが一緒にお店を始めるきっかけだったとか。その後の Julie への恋心は・・・？）

そして、ボストン伝統のチョコレートチップクッキーのレシピと、チョコレートとナッツにこだわったフランスのテイストを合わせた独自のクッキーを生み出しました。ダークチョコレート、ミルクチョコレート、ホワイトチョコレートを使ったチョコレートチャンククッキーは、とても軟らかく、口の中でとろける、この柔らかさが持ち味です。それにナッツを添えた歯ごたえのあるクッキーも絶品。知らぬ間に手が出てしまい、何枚でもいいけます。（これは、ちょっと危険かも？）



自分のおすすめは、なんといっても、Ménage à Trois®。フランス語の意味としては、ちょっと意味深な言葉のようですが、フランス語の解らない自分には、とにかく美味しい一品で、3種のチョコレートチャンクを一つにまとめた絶品のクッキーです。この名前、商標登録もしているようで、まさに自信作です。それに、Macadamia and White Chocolate や、Lemon White Chocolate など、ホワイトチョコレート物は本当に美味しいですよ（もちろん、ダークチョコやミルクチョコも、美味しいのですが、自分がホワイトチョコが好きなので、ちょっとひと押し）。



また、このお店では、ユニークなギフトパッケージをたくさん用意してあります。小さなお子さんが喜ぶ機関車や動物をあしらったバックや陶器の入れ物、置物としても欲しいと思う豪華な容器などに、お好みのクッキーを入れて買うことができます。お店で見ていると、あれも欲しい、これもいいな、とつい、クッキーを 買いに来たことを忘れてしまう楽しさです。我が家でも、ちょっとした御礼やパーティーの時などに、そうしたギフトパッケージを用意し、大変喜ばれています（たぶん）。もちろん、買いに行った時には、我が家の分もしっかり買いますよ（ついつい、余分な出費が…）。



これからホームパーティーに招待されることも多い季節。時には、こうした贅沢クッキーもいいんじゃないですか。

現在、トロント地区には、2店あります。ぜひ一度覗いてみてください。

Monsieur Félix & Mr. Norton  
8601 Warden Ave.  
at Highway 7 Markham  
905 479 2172  
[www.cookiesandfudge.com](http://www.cookiesandfudge.com)

Monsieur Félix & Mr. Norton  
Toronto Eaton Centre South Toronto  
416 595 5379  
[www.freshlybaked4u.com](http://www.freshlybaked4u.com)

**Born In Canada —カナダのこんぱ会社**

「携帯をもっとお洒落に清潔に ～アイ・スキン社～」



日本貿易振興機構（ジェトロ）トロントセンター  
樽谷範哉

日本では若者の携帯電話には必ずといっていい程、ストラップなどのアクセサリーがついていますね。でもカナダでは日本ほど見かけることはありません。カナダのビジネスパーソンの多くが利用しているブラックベリー（注）やiPhoneにはストラップを通す穴がついていないことが多いのです。i-Modeなどの携帯電話からブラックベリーやiPhoneに変えた方は、案外こんなところで戸惑っているのかもしれない。



ブラックベリーやiPhoneをもっとお洒落にしたい。そんな方にお勧めなのがトロントにあるi-skin inc.（アイスキン社）が提供するカバーケース。同社のウェブサイトから20ドル～30ドル程度で購入できます。iPhoneやi-podの美しさを引き出すデザイン性に優れた同社の製品は、カナダは勿論のこと、日本でも多くの支持を集めています。



写真左：ブラックベリー用カバーケース  
写真右：iPhone, i-pod用カバーケース  
【写真提供:i-skin社】

豊富な製品ラインアップには、携帯端末以外にもラップトップ用のキーボードカバーケースやディスプレイカバーケース、お洒落なヘッドホンやイヤホンなども含まれています。同社の製品はデザイン性に富むばかりか、操作性にも優れている上、臭いや汚れの増殖を防ぐ優れた殺菌作用を要しているため、新型インフルエンザが広がるこの時期に必要な製品といえるでしょう。病院のシステム機器などにも利用されているようで、その殺菌作用はお墨付きを得ているといえます。

豊富な製品ラインアップには、携帯端末以外にもラップトップ用のキーボードカバーケースやディスプレイカバーケース、お洒落なヘッドホンやイヤホンなども含まれています。同社の製品はデザイン性に富むばかりか、操作性にも優れている上、臭いや汚れの増殖を防ぐ優れた殺菌作用を要しているため、新型インフルエンザが広がるこの時期に必要な製品といえるでしょう。病院のシステム機器などにも利用されているようで、その殺菌作用はお墨付きを得ているといえます。

— Dress your blackberry up !

この冬、殺菌対策も兼ねて、ブラックベリーをドレスアップしてみたいかがでしょうか？

※前回(09年09月)の会社紹介[スペシャル・ビュー社](#)に続き、『iPhone』や『i-Pod』関連のアプリケーションを紹介しました。カナダには携帯電話やゲーム関連企業が多く集積しています。

(注) カナダのリサーチ・イン・モーション社が開発した携帯端末。

[http://www.torontoshokokai.org/trillium/200504/cacompany\\_0504.htm](http://www.torontoshokokai.org/trillium/200504/cacompany_0504.htm)

## ≪著者プロフィール≫

樽谷範哉

日本貿易振興機構（ジェトロ）トロントセンター勤務。カナダ経済・産業情報の収集やカナダ企業への対日ビジネス支援を行っています。ご質問がございましたら何なりとお申し付けください。 [Noriya\\_Tarutani@jetro.go.jp](mailto:Noriya_Tarutani@jetro.go.jp)

## HELP!体験記

### 「飛行機のトラブル」



在トロント日本総領事館 川原 聡

トロント総領事館の川原です。7月末に笹尾領事の後任として赴任しました。どうぞよろしく願いいたします。

さて、冬のトラブルということで今回私がお話しさせていただくテーマは、「飛行機に関するトラブル」です。吹雪による欠航に巻き込まれた方も多いのではないでしょうか。中には私よりも多く飛行機を利用されている方も多々いらっしゃると思いますが、利用回数の割には比較的トラブルに巻き込まれている私です。

#### ●突然の欠航

私は日本からトロントへ赴任する際、シカゴを経由しました。7月28日、日本からの便を降り、別のターミナルに移動。乗り継ぎ便搭乗口の前で、しばし休憩とばかりに休息しているのも束の間、カウンターの職員が機材故障による出発遅延をアナウンスし始めました。利用客はそこそこのため変な勤ぐりはしませんでした。それから待たされること2時間。

機内で眠れなかったこともあり、いつの間にかうとうとしていた私。気づくと周りに誰もいません。欠航を知った乗客達はすでに別のカウンターで手続きを取っていたのでした。カウンターで話を聞くと、私はすでに翌早朝の便にブックされていました。トロントでは笹尾氏が待っていたこともあり、連絡。相談の上結果的にこのブックングを受け入れましたが、「何を勝手に翌日に…」というのが本音でした。

なお、当日のホテルは航空会社が留保し、宿泊代に加え15ドル分のレストランのバウチャーも航空会社の負担でした。疲れていた私はバウチャーを頼りにルームサービスを頼みましたが、空腹で量を考えず大量に注文し、チップやら税金やらで結局35ドルも支払い、なんともベースを乱された1日でした。

#### ●なぜ？オーバーブック

欠航はある程度やむを得ないとしましょう。しかし、どうも理解できないのがオーバーブックです。夏期休暇で訪れた米国のある空港で、自分の搭乗する便に対しボランティア（自主的搭乗回避）を募集するアナウンスが流れたのです。

内容は、数時間後の同じ路線にてファーストクラスを用意するというものでした。朝も暗いうちから起床し、毎度の煩雑な搭乗手続きを経てようやく到着した末にこのアナウンス…。その便を逃すと次の目的地への訪問が台無しになるため少し焦りましたが、あるご夫妻がボランティアに名乗り出てくれたおかげで事なきを得たのです。

これも規模が巨大故、システム上仕方のないことなのかもしれませんが…。いつ欠航がおこるか分からないと考えるとどうしても自ら名乗り出る気にはなれません。

#### ●乗り換えのトラブル「ロストバゲッジ」

国際線を利用して他の便に乗り継ぐ場合、荷物のピックアップが必要なケースがありますが、私は出張で経由したロンドン・ヒースロー空港とNY・JFK空港で計2度、ロストバゲッジを経験しました。ヒースローでは、日本からの便が50分遅れ、次の便への乗り継ぎ時間が40分となり、トランクが間に合わないかもと不安に思いつつも自分は乗り継ぎ便に駆け込み、案内の定トランクは届きませんでした。ホテルからつたない英語で必死に問い合わせ、便が多い路線でもあったことからその日のうちに到着しました。

しかし、JFKでは多少事情が違いました。バゲージクレームでピックアップし、ターミナルの通路に出るまでの間に荷物預け入れポイントが出現、一人だけ立っていた男性が「ここで預けていけ」と主張。実はこれは旅行代理店から指示された場所と違ったのですが、自信満々のこの男性の助言を私と同僚の3人は信用し、そこで預け次の便に乗りました。しかし、我々3人と私の荷物、同僚2人の荷物は目的地とは異なる3つの国へと旅立ったのです。

トランクが到着したのは2人が翌日、もう1人は翌々日のことでした。長旅のためスーツをトランクに入れていた我々は目的地でスーツを着ることができず、どうしても必要だったため3人で町をさまよひ、なんとかYシャツを買い、ジャケットは借りて事なきを得ました。

#### ●突然の行き先変更

これはインドでの事ですが、搭乗率が低かったのか、成田行きの飛行機が突然バンコク経由の1ストップ便に変更になったことがありました。

日本で重要な用務があった幹部がこのあおりを受け、その後便を何度も変更した挙げ句、利用便が遅れその幹部が空港で立ち往生するなど、相当あわてたことを覚えています。

北米の航空会社でも似たような事例を聞いたことがありますが、日本人には理解しがたいのではないのでしょうか。この現地某航空会社、この前日には鳥が「接触した」（エンジンへの巻き込みでなく）という理由で欠航し、現地の新聞にも載りました。あなどれません。

## ●飛行機に対する私の考え方・備え

### 1) 欠航は仕方なし

欠航を機に、空港で出発情報を眺めてみると、想像以上に欠航は多いことが分かります。機材故障、機材繰り、理由はいろいろで、確率にすると微々たるものかもしれません。それでも欠航が日常的であることは空港職員の実に淡々とした対応が表しています。そして我々はそれに対し為す術がありません。文句を言っても互いに不機嫌になるだけです。

この夏は普段にまして雷雨が多かったとのことですが、雷雨による欠航や遅延に巻き込まれたという方が私の周りにもいらっしゃいました。重要な会議の前に欠航などに遭遇すると、ついあり得ないと思ってしまうのですが、国土が巨大な北米では列車やバスが必ずしも便利でないことを考えると、ビジネスシーンにおける飛行機への依存は避けられないところであり、欠航は仕方がないと認識し、とにかくあわてず冷静に対処することが重要なでしょう。

### 2) 事前の確認

ピアソン空港はよく利用しますが、日本からの便は1時間早着することもざらで、GTAサイトでの発着情報確認は欠かせません。また、万全を期して事前に予約の電話確認をする場合もあります（国によっては必須）。

そんな中、一部の航空会社で予約客に運航便のキャンセル・遅延情報をメールで伝えるサービスが始まるそうです。悪天候などで運休になった場合、代替便情報も提供し予約変更をパソコン、携帯情報端末で受け付けるとの事です。これから厳しい冬を迎え、気象条件がいつそう航空会社を悩ませるのかもしれませんが、このようなサービスは利用客としてもありがたいのではないのでしょうか。他の航空会社にもこのようなサービスが広がっていくとうれしいですね。

### 3) 乗り継ぎにおける荷物預け入れポイント

私は赴任でシカゴ・オヘアを使用するにあたり、トランクの預け入れポイントを事前に教示されましたが、これが実際わかりにくく、荷物も多くて迷っているところを日本人スタッフの方が親切にポイントまで連れて行ってくださいました。ただ、たどり着くと、そこはとても一般の乗客が預け入れポイントとは認識できそうにない場所。そこに黙々と荷物を捌く職員が二人。

シカゴ・オヘアのロスバゲッジは有名であることを聞かされていたことから、3度目のロスが頭をよぎりましたが、そのスタッフにしっかり確認、指示をして

くれたこともあり、荷物は無事届きました。こういったことから、初めての空港（特に巨大なハブ空港）ではバゲージクレームの近くで日本人スタッフに確認をするようにしています。

### 4) ESTA(電子渡航認証システム)は試行段階

直前の入国審査では、私のパスポートをしばし眺め、他の管理官と何やら相談していたので、戻ってきた時にESTAの事を話しましたが反応が薄い。そのスタッフの方によると、先般米国が導入したESTAについて残念ながらすべての入国管理官が正確に把握しているわけではないそうで、あくまで試行段階であるとの現状を教えてくださいました。入国審査ではとにかく管理官の質問に正確に答えるということでしょうか。

### 5) 米国では25セントコインが便利

欠航等のトラブルに遭遇すると、携帯をお持ちであれば問題はないでしょうが、万が一持っていないければ、どこかで電話をする必要もでてきます。私はシカゴオヘアで電話を架けたくてもコインがなく、わざわざ水を買ひ、そのおつりで電話をかけました。

また、空港近辺のホテルなど一部では送迎が無料であっても、まずはフロントに電話をかける必要がある場合もあります。公共交通機関でもコインは重宝します。米国ではダウンタウンと空港間で一般の路線バスや地下鉄が運行されている場合が多く、結構な距離でも僅か1.25ドルで利用できる場所もあります（シアトルやヒューストン等）。ほとんどの空港で両替機はなく、おれでは対応できないと乗車を断られたことがあります。米国への訪問が複数回に及ぶ場合は、次回のためにクォーターコインを数枚残しておくと思いいます。

HELP体験記とうことでトラブルばかり書きましたが、飛行機は実際我々に欠かせぬものです。利用の仕方ひとつで便利にもなれば、経済的にもなりますし、うまくつきあっていきたいですね。

## 専務理事のぼたぼた日記

### 第33回



商工会事務局 伊東 義員

10月祭り日 補習校は秋祭り：わっせ！わっせ！！

小さい頃、秋になると楽しみだったのが、町内会のお祭りとお祭りと秋の大運動会。なぜ、「大」なのか？自分の小学校のころは、春に「小」運動会があったから（懐かしいなあ）。そこで、カナダの短い、（本当に短い！・・・）なにもそんなに強調しなくても）秋に、子供たちに日本的行事を体験して欲しいという思いから、補習校小学校2年生中心に秋祭りが行われた。自分たちで飾りつけをした御神輿を担ぎ、周りで見ている幼稚部園児、小学1年生、それを暖かい目で見守る保護者の方々からの掛け声で、最高潮へ。みんなの顔が教室にいるときはチョット違うぞ。普段は、おとなしい子たちも、気持ちの中に騒ぐものが沸き起こってくるんじゃないかな。

自分も小さいころは、お祭りで山車を引いて、お菓子やみかん、柿などをもらうのが楽しみだった。いつかは、御神輿を担いでみたいと思いつつながら、結局、そうした機会はなかったが。実家の母に聞くと、今は子どもたちが参加しないので、年寄りばかりのお祭りで盛り上がらないという。かえって、外地にいるほうが、こうしたお祭りを体験できていいのかも。

同じ日、高等部で初めて運動会を行った。生徒会が主導して計画を立て、先生方の協力で授業時間を少しづつ削り、午後の1時間ほどの少ない時間ながら、楽しんだ。残念ながら前夜より雨が降り、体育館での開催となったが、まあ、それはそれで。学年を越えて紅白に別れての激戦！こんな真剣な顔、見たことないぞ！！現地校では、テストやプロジェクトに終われ、あまり身体を動かすことがない生徒たちにとっては、とてもよい時間だったようだ。特に、生徒たちが自ら企画し、皆の協力を得て実施できたことがとてもうれしい。みんな、成長したな！成長してないのは、自分だけか？

#### 10月ランチョン日 ランチョン講演会：やはり、うまいなあ！昼食じゃなく、講演がです！

トロントには、商工会と同じような目的で設立されたジャパン・ソサエティという団体がある。ただ、商工会が日系企業中心の団体であるのに対し、こちらはカナダ企業が中心（かな）。お互い協力し合って、日加の親善、交流、ビジネス振興に寄与しようという間柄。そのジャパン・ソサエティが西田大使のランチョン講演会を開催するので、会員の皆さんにもご案内して欲しいとの連絡を受け、自分にもご招待を。お昼が食べられる♪♪と、いそいそと出かけた（おいおい、西田大使のお話が目的じゃないんかい！）。

会場は、お馴染みのダウタウンの法律事務所内。この法律事務所、自分が商工会に来る前にお世話になった会社の顧問法律事務所で、何度となく足を運んだからか、受付の女性に名前を覚えられている。「ハ～イ、ミスター・イトウ」、相変わらず愛嬌がいい！西田大使のお話は、さすが。コメントなどできない上手さ。今後のために参考にせにや。事前に十分時間をかけて原稿を仕上げるんだらうな。自分は、いつもいきあたりばったりで勝負して、連敗中。戦略変更は必至だな。でも、さてどうすれば？

#### 10月日本語日 JF 日本語教育レクチャー：キューバで日本語教育？

日本語教育にも力を入れている国際交流基金が、日本語教育レクチャーを開催し、どんな場所にも顔を出すオヤジとしては、興味深々と出席した。レクチャーのテーマは、「キューバにおける日本語教育」え！キューバで日本語教育？自分の少ない知識の中では、キューバと日本語教育とは、まったく結びつかなかった。でも、レクチャーを聴いて、意外や意外（失礼！）、キューバの外国語教育、侮れない。

大学の先生は、一人で2ヶ国語、3ヶ国語を教え、学生も日本の大学でのカリキュラム時間とは比較にならないほどの時間（4年ないしは6年間で4500時間？）を費やし（来年以降、ちょっと減るようだが）、通訳や研究者になるという。

ちなみに、日本人観光客は、年間700～800人だそうで、やっぱり日本からは遠い国。でも、観光に訪れるのがみんな同じ時期に集中しているので、日本語ガイドの仕事は一時的にはあるが、需要があるらしい。やはり、仕事を得るために語学勉強に必至になる人、そしてそれを支援する大学、政府は違う。何事も一生懸命にならにや。カナダに17年以上いるが、一向に上手くならない自分の英語を振り返ると、情けない（と、自分への反省多し）。

#### 10月交流日 借用校交流会：盛り上がったな。自分のスピーチが無ければもっと・・・

補習校は、トロントの教育委員会から現在の校舎を1982年より借用しており、今年で27年。補習校に通う生徒の住居地域は徐々にトロント市の外郭に広がってきているとはいえ、まだまだトロント市内に住んでいる生徒が半数。これまで大過なく運営できたのもひとえに教室を使わせてくれる現地校の先生方の協力があればこそ。

しかし、補習校は土曜日の開校なので、クラスの先生と会う機会はほとんどない。そこで、年に一度、交流会を開催している。今年も、空港近くのホテルでのディナーパーティーに招待した。現地校、補習校で総勢約40名強。本当は、もっと参加していただきたいのだが、土曜日の夜で、わざわざ休みの日に出てきてくださる方はどうしても限られるようだ。交流会に先立ち、会員企業さんに景品粗品の御願いをしたところ、皆さん、快く提供してくださり、うれしい悲鳴。参加して下さった現地校の先生方に、抽選で好きなものを順番に選んでいただいた。当日参加できなかった現地校の先生方にも、いただいた景品が渡るように現地校の校長先生にお願いした。次の授業日には、教室の先生から御礼のレターやメモをいただいたクラスも。

補習校は、現地校先生方の協力、補習校先生方の努力、保護者の方の支援、そして企業さんのサポートがあって、はじめて成り立つ。そうした当たり前のことを改めて感じた。交流会では、学校を代表して簡単なスピーチ（それも苦手の英語で！）をした（させられた？）。今回は、メッセージを伝える相手が現地校の先生ということで、それなりの文章を準備（したつもり）。でも、もし日本人向けのスピーチだったら、絶対あんな内容にはしないだらうな。どんな内容か？それ はちょっとここでは・・・。

（上記記述は、筆者の個人的意見、判断で書かれているもので、商工会の意見・意向を反映しているものではありません。また、個別内容について、誤解、理解不足等があるかもしれませんが、それらは全て筆者の責任によるものです。）

## 広報委員のひとりごと

### 「カナディアンぽくなったかな?と思うとき」



ニコン 佐竹 良太

私事ですが12月は私がトロントに赴任してきた月でもあります。アツという間に6年が過ぎましたが、それでも時々、自分自身が「なんとなくカナディアンになった」と感じる場合があります。例えば・・・

- ・ 「12 oz のステーキが食べ切れるようになった」

赴任前、出張でトロントを訪れたときに連れて行かれたステーキレストランで、半分でギブアップした思い出がありますが、今や出張者を連れて行って、その様子を見る側になりました。胃袋が確実に大きくなっています。

- ・ 「カナダの甘〜いケーキが我慢できるようになった」

また食べ物ですが、カナダの甘い&やたらとカラフルなケーキ、未だに慣れはしませんが、それでも出されれば食べられるようになりました。皆さんはどうですか？

- ・ 「嫌なら後で返品すればいいや、と思って買い物するようになった」

日本では、返品するということをあまりしませんでした。しかしこちらでは、しばしばレジの列より返品で並ぶ列のながい、という光景を目にします。私も、妻の買い物に付き合っていて、「合わなかったら返せばいいじゃん」と買わせていることがあります。

- ・ 「思わず、Oops と言ってしまう」

日本にいたとき、海外駐在から戻った先輩が、何か拍子に「Oops」と言うのを聞いて、「それはちょっと外国かぶれでは？」と思っていました。それが気づけば、自分が思わず「Oops!」と口走っています。

- ・ 「寒さへの感覚が鈍くなった」

赴任直後の1月にマイナス25度を体験しました。当時はズボンの下に、日本から持ってきた雪山登山用のスパッツを履いて通勤しました。今では、冬は日本の家の中の方がよっぽど寒いと思うようになりました。

- ・ 「家族との時間を大切にできるようになった」

日本人もカナダ人も家族への思いの深さは同じだとしても、その表現の仕方は全然違うなと思いました。カナダ人の、家族との時間を大切にする姿勢はストレートでわかりやすく、私には共感するところがありました。最近日本では「ワークライフバランス」ということがよく論じられるようですが、日本のサラリーマンには、自分の時間、家族との時間を犠牲にして仕事をしてしまうところがありますよね。

皆さんも、それぞれに大なり小なり、ここトロントでの生活から何らかの影響を受けて、自然と感覚が変わってきていることがあるのではないのでしょうか？ その変化自体も、ふと振り返ってみると意外と面白いものですね。

### 【編集後記】

12月です！雪も降り、冬本番となってまいりました。長くつらい冬ですが、楽しみもたくさんあります。クリスマスのプレゼントは大人になってもうれしいものですし、忘・新年会もお酒を楽しむよい理由となりますね。今年一年とりりあむをご愛読いただきありがとうございます！来年もどうぞよろしく願います。皆様、よいお年を！

(神林) E-Mail: [shokokai@echo-on.net](mailto:shokokai@echo-on.net)